PHAYAOレポート 2008-07（～モンの名前をもらう～）

スタディツアー参加者からの報告　（日刊新周南　連載記事から）

藤屋侃二さん(68)　下松市幸ヶ丘　　元KRY取締役ラジオ局長

2008年（平成20年）11月13日（木）　4

少数民族モンを訪ねる
～モンの名前をもらう

モン族にはモン以外で非常に親しくなった人にモンの名前を贈る習慣がある。

この粋でホスピタリティに富んだ習慣を知ったのは、モン族との出会いの旅に出かける前に安井清子著「空の民の子どもたち」を読んだからだ。

第二次世界大戦後に起きたインドシナ内戦でラオスに住んでいたモン族の多くは難民となり、三万人を超える人がタイのバンビナイ難民キャンプにいた。

著者の安井さんはそこで子どもたちに絵本の読み聞かせのボランティア活動を五年半続けた。その時の体験をつづったのが「空の民の子どもたち」だ。その中に彼女が「パヌン（ひまわり）」というモンの名前をもらった話があった。

その時は別に何とも思わなかったが、六人の仲間とモン族を訪ねて実際にモンの名前をもらった時には言葉にできないほどの感動を受けた。

名前をもらったのは六人の仲間の紅一点、山口県立大学二年生の酒向令恵さんという可愛い女子大生である。

酒向さんは母子家庭にホームステイし、そこで十七歳のチェンという娘さんと親しくなり、別れる時、彼女から手紙をもらった。

モン族は文字を持たないので、タイ語で書かれたその手紙を現地のスタッフに訳してもらった。

「貴女にモンの名前をあげます。貴女の名前はモンバイ（蝶々＝チョウチョ）。貴女は蝶々のように素敵なひと。貴女の恋人になる人は幸せ者です。別れても、いつまでも貴女のことを忘れません。

十七歳、チェン」

この名前の話を酒向さんから聞いたのは山のモン族のロッジから平地のシャンティ学生寮に帰る車中だった。

前夜は山のモンの人たちとの別れの宴。目の前で殺された豚づくしの料理。どうしても食べられず、モンの焼酎ばかり飲んだため、翌朝すべて吐き、体調は極めて悪かった。

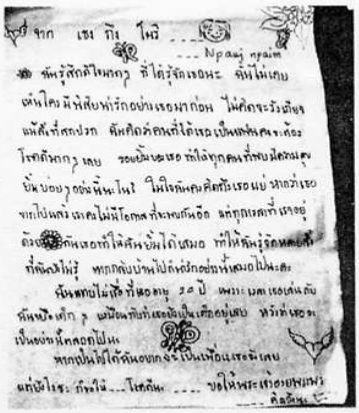
酒向さんは私の背中をさすりながら、モンの名前の話をしてくれた。彼女の優しさとモン族の粋な習慣に涙が止まらなかった。

デジカメに残るチェンとの写真やお母さんとなまず釣りに行った写真を見ているうちに胃が痛いのを忘れてしまった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

酒向さん（左）とチェンさん

ナマズを釣ったチェンのお母さん


จาก เธอ กับ ไผ่ ....
....Npauj nyaim
ขอให้พระเจ้าอยู่ด้วยเสมอ
....คิลลีหน
酒向さんがもらったタイ語の手紙